

論文

正気と狂気のあいだ

—コルニー・ハッチ精神病院火災事件（一九〇三年）の表象をめぐって

高 林 陽 展

キーワード

ミシエル・フーコー ロイ・ポーター 精神医療史 狂気表象 精神病院

はじめに

精神医療の歴史を考えると、ミシエル・フーコーの『狂気の歴史』はいまなお無視することができない著作である¹。彼の議論は、後述するように、実証面で多くの批判を受けてきた。それにもかかわらず、精神医療の歴史に関する文献ではいまなお言及される。それは、『狂気の歴史』がいまだ参照すべき思索を含んでいるからである。その主張はさしあたり、以下のように要約できよう。一七一—一八世紀のヨーロッパで展開された啓蒙主義は、人間の理性を

強調する一方、狂気を非理性の代表格と位置づけ、両者の間に明確な文化的境界線を引き、後者を精神病院という治療と矯正のための空間に閉じ込め、精神科医という専門職の管理下に置いた。ここに近代的な精神医療の歴史が始まる。

このような見解は、少なくとも一九七〇年代までは熱狂的に支持されたが、一九八〇年代になると次第に批判の対象となった。フーコーの議論を批判した代表的な歴史家は、二〇世紀後半の指導的な医学史家ロイ・ポーターである²。彼は、フーコーが「事実」(fact)に関して「性急でルーズ」³

(Fast and Loose)であり、対象となった事例を歴史的にどこかニュートラルにとらえ、変化の前提を十分には検討しようとしないと評した⁴⁾。とくに、阿呆船 (ship of fools) や大監禁 (great confinement) といった『狂気の歴史』に描かれた議論については、イングランドには当てはまらないと主張した。ポーター以後に登場したフーコーに批判的な歴史学的研究の多くは、精神病院の病院史料や救貧行政の史料などを用いて、イングランドでの近代的な精神医療の勃興が、医療をサービスとして消費する文化、治安判事の地方行政や救貧行政のあり方、地方経済や移民などの社会的経済的な要因が複合的に作用した結果だと実証的に明らかにした⁵⁾⁶⁾。

ポーターらの批判は、主として精神病院の成立とそこへの精神病者の収容をめぐる問題に向けられた。一方で、狂気の文化的形象をめぐるフーコーの議論に対しては、さしたる批判は行わなかった。そのため、文化面の議論について、フーコーは比較的肯定的に受容されてきた。つまり、フーコー派とポーター派が二項対立的に存在しているわけだが、その対立軸はいささかずれている。いずれにしても、このようなフーコー受容のあり方は今なお精神医療史をめぐる研究動向の重要な一部となっている。この点については次節で詳しく説明したい。

本稿の課題は、狂気表象に関する研究動向を精査したうえで、実証的な事例の検討から、二〇世紀初頭の英国における狂気表象の特質を検討することである。事例は、一九〇三年一月二七日、ロンドン北部の公立精神病院コルニー・ハッチ精神病院 (Colney Hatch Asylum) で起こった火災事件に関する表象である。この火災事件は同病院の仮設病棟で起こり、五一名の命を奪った、公共施設の火災としては類を見ないほどの死傷者が出た事件である。英国のメディアはこの事件について報道合戦を繰り広げ、結果として、数百点に及ぶ記事が約一月の間に世に送り出された。これは、精神病院や精神疾患をめぐる表象の量としては類を見ないほどの規模であった。

本稿で用いる史料について補足しておく、取りあげる新聞や雑誌の多くは、ロンドン首都史料館 (London Metropolitan Archive) 所蔵のロンドン州議会文書に収められたプレス・カッピング、つまり精神医療行政当局による新聞記事の切り抜き集から得られたものである。この切り抜き集は、精神医療に関する諸報道を精神医療行政当局が収集したものであり、以下のような特徴ないしバイアスが認められる。まず、集められた記事の約三分の一は、『ランセット』(The Lancet) や『英国医学雑誌』(British Medical Journal) とくった医学雑誌に掲載されたもので

あり、必ずしも社会一般から見た狂気表象の問題を取り扱っていない。次に、その他の一般紙の記事の多くは、コルニー・ハッチ火災事件の報道を除けば、基本的にはロンドン州議会側の発表を短報として掲載するものであり、火災事件の報道を安易に一般化することはできない。以上の点には注意が必要である。

そのうえで、コルニー・ハッチ火災事件を報道する記事について述べておきたい。右記切り抜き集は、火災が発生した一九〇三年一月二七日からおよそ一カ月の間に刊行された大衆向けの朝刊紙と夕刊紙の記事約二五〇点を収録している。当時のメディアガイドブックに従えば、これら各紙の政治的な傾向は、保守主義、自由主義、あるいはいはいずれからも独立などと評されており、政治的な党派性は見られない。⁸⁾つまり、センセーショナル性やエンターテイメント性が比較的要求される、首都ロンドンの大衆紙による表象というバイアスが、この火災報道については認められる。付け加えておくと、記事の収集に際しての方針は示されておらず、外部に公表・報告する目的をもたない内部資料であり、右記のバイアスは収集者側の意図によるものとは言い難い。⁹⁾以上の点を考慮し、本稿では、「一九世紀コレクションオンライン」(Nineteenth Century Collection)や「英国刊行物オンライン」(British Periodicals)などの一次史

料データベースも用い、想定されるバイアスの補正を可能な限り試みていることを付け加えておきたい。

一 狂気の他者化をめぐる

狂気の表象に関する研究を概観するにあたって、いま一度『狂気の歴史』の議論を確認しておきたい。フーコーが言うには、近代ヨーロッパでは啓蒙主義のもとで正気と狂気が理念として分割され、両者の文化的な距離は著しく拡大した。狂気は、正気の知と理性によって観察される対象となり、精神病院という空間に留め置かれることになった。¹⁰⁾すなわち、近代ヨーロッパにおいて狂気は他者化された。この議論は、後述するように、その後の狂気表象の議論の基調をなすものとなった。

フーコーは、狂気の他者化が単なる疎外にはとどまらないことも指摘している。『狂気の歴史』第三部第三章「自由の適切な利用」においてフーコーは、近代ヨーロッパにおける根本的な変化とは、狂気でないこと意識 (consciousness of not being mad) をもたらしたことだと論じている。¹¹⁾啓蒙主義のもとで正気と狂気が理念的に分けられるとき、正気は狂気を文化的に遠ざけるだけではなく、

正気自身の中に狂気性がないことを確認する。それにより、正気の側に身を置く者たちは安寧を得ることができる。ただしその結果、日常的に不断に、正気の者たちは正気らしい理性的なふるまいを求められることになる。論理的かつ数量的な判断ができることから困難を抱える隣人を助けることまで、狂人ができないことをすることが重要となる。

ここには、ホルクハイマーとアドルノが言うところの「啓蒙の弁証法」の影響が見て取れる。啓蒙の弁証法とは、啓蒙主義のもとで人間の理性が絶対化されることにより、一方では非合理的な思考からは自由になるのだが、他方では非合理性を追放したのちの人間はすべて合理的であらねばならず、合理性という規範に従順に従った振る舞いや行動が求められることになる、という啓蒙主義が抱える循環的な局面を表現した概念である。この考え方について、フーコーに批判的なポーターは、意図的に偏った(willfully opposed)見方¹³であるとか、歴史的に見れば戯言だとぼつさり切り捨てた。彼としては、近世史の実証ベースでは啓蒙の弁証法は見られない現象だというのである。しかし、過去の研究では十分な実証的検討が加えられたとは言いがたく、本稿で実証的な検討を加える意義は十分に認められるだろう。

フーコーにならった「狂気の他者化」論は多くの研究者

に受容されてきた。例えば、アメリカの医学史家サンダー・ギルマンは、フロイトの精神分析を参照しつつ狂気表象を分析している¹⁴。ギルマンによると、西洋世界では虚脱への恐れ、衰弱の感覚というイメージでもって病が表象され、その恐怖を飼い馴らすために、自己の外部にその恐怖の位置を定位させるといふシステムが形成された。この外在化あるいは他者化された恐怖表象はもちろん自然発生的なものではなく、特定のイデオロギーのもとで特定の社会集団や人口グループに割り当てられるものである。たとえば、彼のユダヤ人表象に関する研究では、いかにしてユダヤ人たちが病の表象と結び付けられ、すなわち西洋世界において他者として疎外されてきたかが論じられている。

このようなギルマンの議論に対しては一定の批判があるものの¹⁵、いまなお重要な研究として多くの研究者に参照され続けている。それは、スーザン・ソクタグの『隠喩としての病』など、多くの文化研究者たちによって病の表象が社会的疎外の効果をもつものだと論じられてきたからであり、歴史学においてもその議論を支える実証例が積み重ねられてきたからである¹⁶。病とそれにかかった者が人間を襲う怪物ないし侵略者として表わされることが近代西洋世界の文化的なパターンのひとつだという見方は確立されたものと言えるだろう。

狂気の他者化は、社会史に近いアプローチをとる研究においても論じられてきた。精神医学史家ジョン・サナン・ドリュースは、一九九八年の論考で、一九世紀グラスゴウのガートナヴァル精神病院の臨床記録を用いて、精神病者の主体性の問題を探求した。¹⁹⁾ そこから得られた見解は、一九世紀が進むにつれて精神疾患に関する器質論的な解釈が力を増してゆき、臨床記録も臨床医学的まなざしの色合いを濃くしてゆく、つまり病者が客体化してゆくことであった。たとえば、一九世紀初頭の臨床記録には、患者が医者との質問に答える様子や友人が面会に来た際の様子などが記録されている。²⁰⁾ しかし、一九世紀後半に生物学的な志向をもつ精神科医が院長として着任すると、患者やその家族からもたらされる情報は無視されるようになった。²¹⁾ 患者よりも医学の枠組みが重要視されるということであり、フーコーに近い議論と言えるだろう。

一九世紀英国の精神病院において入院患者がその主体性をはく奪されていたという見解は、臨床記録に収められた患者の手記や手紙の問題からも傍証できる。アンドリュースは、患者の手記や手紙が臨床記録に収められているのは、第一義的には患者の狂気を証明するという医学的な目的のためだと論じた。²²⁾ 手記や手紙は、そこに非合理的な内容が含まれているからこそ、狂気の証拠として臨床記録の

なかに収められ、精神病者を精神病院にとどめるための法的な証拠となるのである。また、アンドリュースは、患者の手記や手紙が精神病院のパトロンであった地域名望家層を歓待するために使われたことも明らかにしている。²³⁾ ここには、正気の側にある者たちに狂気という他者を理解させ、その分割を強化するというフーコーに準じる洞察が認められる。

一方、こうした議論に対する批判も存在する。旗振り役はポーターである。厳密に言えば、彼は狂気の他者化だけではなく、病者そのものの主体性を否定的にみるフーコー派の研究を総じて否定した。フーコーは『臨床医学の誕生』で、一九世紀初頭のパリの病院において臨床診断の際に病者の愁訴ではなくその身体に直接原因を聴く手法が開発されたことを強調し、それを「臨床医学のまなざし」(clinical gaze)と名付けた。²⁴⁾ この議論は、E・H・アッカークネヒト、メアリー・フィセル、ニコラス・ジュンソン、デヴィッド・アームストラングら、多くの医学史家や医療社会学者たちに支持された。²⁵⁾ ポーターは、臨床医学のまなざしを「非歴史的」(ahistorical)で逆行的な社会学の産物と論じた。²⁶⁾ 本質的に近世史家であるポーターは、近世期イングランドにおいてはフーコーが言うような医学の専横的な支配はないことを実証的に学んでおり、それがゆえにフーコーに批判

的だった。これに関連して、医学史家のフローリン・コンドロウは、ポーターが伝統的な医師中心の医学史を病者の視点を用いることで医学の社会史として再編しようとしていたことを、彼のフーコー批判の理由として論じている。コンドロウに従えば、ポーターは、病者の声は医学史を書き直すうえで、すなわち医学史研究を進展させるうえで欠かせないものだと考えていた。そのため、医師の主導性ないし権力を認めてしまつては病者のナラティブから医学史を語りなおすことができない。だから、反フーコーにならざるを得ないのである。

コンドロウの批判はさておき、実証的な立場からフーコーを批判的にみる歴史家はポーターに続いた。近年の研究動向を見るならば、近代英国の医療と慈善を研究してきた歴史家キア・ワディントンが中心となった「オフ・シツク・プロジェクト」と呼ばれる共同研究に注目すべきだろう。このプロジェクトは、カーディフ大学を中心として、南ウエールズにおける文学的・歴史的な病の語りを集積し、病者が自らの病を理解すること、すなわち病者のナラティブの歴史的意義を検証するものである。ここでは、集められた語りの実証を通じて、臨床医学のまなざしのもとで病者が対象化され沈黙を迫られたというのは実証的には妥当ではないことが主張された。ワディントンが扱った病のナ

ラティブにおいて、医学との遭遇の局面は病者によって柔軟に理解され、また彼ら自身のやり方で病とその経験は意味付けられた。すなわち、病者と医学との遭遇は「交渉」(negotiate)されていたとるのである。さらに、前出のアンドリユースの議論に対して、ワディントンは異なる見方を示した。彼は、患者の手記や手紙は臨床医学のまなざしに回収されえない語りも含むものだったと考えた。それは、彼が調査したイングラントで最も重要な精神病院であるベスレム精神病院 (Bethlem Royal Hospital) の臨床記録に収められた患者の手紙に、患者が自身を「神が選びしもの」(the chosen of god) とか「完全なる人間」(perfect man) として描いていることや、将来の数学についての空想的な話、あるイタリアのカフェで一〇〇万本のワインのボトルを飲んだ話などが書かれていたことを根拠としている。これらの語りの内容は、臨床医学のまなざしから逸脱する性格を持つものだというのである。

この点に関連して、ベスレム精神病院の臨床記録について研究した医学史家鈴木晃仁の一九九九年の論考に言及しておきたい。この論文は、一九世紀中葉のベスレム精神病院における臨床記録作成と保持の状況を検討したものである。そこでは、一八五二年までは、入院患者の友人が述べられる精神病の原因については病院当局から目立って論駁され

なかったが、この年に臨床記録の保管が原則化されると、医師は患者から聞いた内容をもって病因を特定するようになったことが示される。これは、単に医学的なレジームの強化というだけではなく、慈善事業としての特徴やベスレム精神病院の入院制度の問題とも絡んだ問題なのだが、いずれにしても重要なのは、一八五二年になると行政からの圧力によって入院患者の臨床記録の管理が義務付けられ、入院患者の情報が医師によって確実に定期的に集積されたことである。鈴木は、臨床記録の情報の重要な部分は患者自身の語りからもたらされたものであり、医師のまなざしはさほど一方向的なものではないと結論する。

このように、ポーターにならった患者論を支持する歴史家たちは、精神病者の主体性を一定程度認めようとする研究の方向性を推し進めた。それは、二〇一六年に学術誌『メダイカル・ヒストリー』に掲載された特集号「患者論的転回：ロイ・ポーターと精神医学の物語」からも確認できる。その副題が示す通り、ポーター的な患者論を今後の精神医学史研究で進めようという意図をもったものである。³⁴これに従えば、フーコー派の議論は極端で例外的な事例をもとにしていることが多く、より日常的かつ全体的な患者の歴史を志向することで現在の二極化は乗り越えうるといふ。アンドリュースの研究は管見の限りでは極端な事例を扱って

いるとは言い難いのだが、いずれにしても近代ヨーロッパにおける病者の主体性をめぐっては、一方の極にフーコー、もう一方の極にポーターがいることは間違いないだろう。このような二項対立的な議論の状況をふまえると、本稿が狂気表象をめぐる実証的な事例の検討に至るのには十分な意義が認められる。

二 イングランド精神医療とコルニー・ハッチ精神病院

本題の火災事件を論じるにあたり、二〇世紀初頭までのイングランド精神医療について概観しておきたい。一九世紀前半のイングランドでは、精神病の治癒について非常に楽観的な見通しが医学的かつ社会的に支持されており、それがこの時期の精神病院の建設ラッシュを後押しした。精神病は、家庭的な環境を提供し規律に沿った生活をおくらせるための再教育を行えば治癒可能な病であり、その治療を担うのが専門施設である精神病院だと広く理解されていた。³⁵しかし実際には、精神病院での治癒率は伸び悩み、むしろ精神病院への入院患者数は増え続けた。一八五九年には約三万五〇〇〇人だった入院患者数は一八九八年には一〇万人を突破し、大規模精神病院では一か所あたり二〇〇〇人を超える患者が収容された。³⁶その結果、一九世

紀末頃に精神病院への楽観論は悲観論に転じた^{④7}。しかし、増え続ける精神病患者の収容先として精神病院は消極的に造られ続けた。

本稿が取り上げるコルニー・ハッチ精神病院は、楽観論の時代である一八五八年にロンドン北部のコルニー・ハッチに設立された^{④8}。当時の設立母体はミドルセクス州であるが、事実上の設置者は州の治安判事であった。コルニー・ハッチ精神病院は当初、楽観論を反映してか、ピクチャレスクな外観を誇る瀟洒な施設として建造された。しかしその後、悲観論へと転じ、またロンドン州議会（London County Council）へと移管され、その管轄下にある六つの公立精神病院のひとつとなった^{④9}。一九世紀末には、病院をめぐる状況は悪化の一途をたどっていた^{⑤0}。

たとえば、医療従事職の少なさである。一九世紀末—二〇世紀初頭にかけて、この病院の入院患者数は二〇〇〇—二五〇〇名程度だったが、医師は院長W・J・セウオード（W. J. Seward）と五名の補助医務官（assistant medical officer）だけだった^{⑤1}。また、一八九二年に医師増員の申請をロンドン州議会に対して行っても、財政上の問題からか、認められなかった。時を同じくして同病院では、食料も敷地内で生産する体制が整えられた。牛乳、食肉、野菜、卵は自主生産体制となり、そのために馬八頭、牝牛

六五頭、牝牛二頭、若い雌牛一〇頭、若い牝牛一〇頭、豚三九七頭、羊六〇頭、鶏五五〇羽、フェレット四匹が飼われた^{⑤2}。これもまた、州財政を背景とした施策だった。

そのため、コルニー・ハッチ精神病院の社会的な評価は非常に低かった。一九〇三年、ある新聞記者は、「コルニー・ハッチは近年においては一世紀前のベドラムと同義語となっている」と述べた^{⑤3}。「ベドラム」(Bedlam)とは一二世紀に建設され、今日も現存するベスレム精神病院を指す俗称であり、狂人の居場所を蔑称する言葉であった。一九〇三年の火災はこのような性格を持つ施設を襲ったものだったのである。

三 コルニー・ハッチ火災事件の経過

一九〇三年一月二七日の早朝、コルニー・ハッチ精神病院を火の手が襲った。出火元は、母屋ではなく、約三二〇人の女性患者を臨時に収容していた仮設病棟、そのリネンを保管する部屋だとされる。出火が確認されたのは午前五時三〇分。仮設病棟の看護婦が火の手を発見し、すぐに火災警報を鳴らした。火災警報が鳴らされると、病院の消防隊がただちに到着した。しかし火は燃え広がり、すでに二棟分を飲み込んでいた。そのため病院消防隊だけでは手に

負えず、地域の消防隊が駆けつけた。ただ、そこで消火に用いる水の供給が不足していることがわかり、さらには強風により火の手はますます強くなった。消防隊と精神科医、看護婦、看護人たちは、このような絶望的な状況のなかで、患者の救出作業をしなければならなかった。そして最終的には、仮設病棟の女性患者五二名が死亡するという事態となった。

ここに描かれたのは、どの報道にも共通する事件の経緯である。精神医療行政当局による報告内容ともほぼ合致する⁽⁴⁾。この火災事件は一般大衆の間にセンセーションを巻き起こした。過去のロンドンで起きた火災事件に比すると、犠牲者数は相当多かった。そのためか、新聞各紙はこの火災事件をとりあげ、「ホロコースト」(Holocaust)「カタストロフ」(Catastrophe)といった言葉で扇情的に報道した⁽⁵⁾。

報道が過熱したことを受けて、当日の晩には、ロンドン州議會は犠牲者に対する哀悼の意を表明した。しかし実際には、ロンドン州議會の関心は失われた生命にはなかったようである。この火災事件に際してロンドン州議會が頭を悩ませたのは、だれがこの事件の責任を負うのかという問題であった。火災直後から新聞各紙は、責任問題をこぞつとりあげた。犯人捜しが始まったのである。その主たる

舞台は検死官による審判だった。一月三〇日になると、検死官によって、死者の検分、出火元の調査、そして精神病院関係者の聴取、仮設病棟の設置経緯についての調査が行われた⁽⁶⁾。こうした調査のなかで、仮設病棟に可燃性の建材が用いられたことが判明し、犯人捜しは白熱した。この事実が火災の深刻化の原因として重視され、最終的に検死官の審判では、病院の設置者たるロンドン州議會、精神病院の全国的な行政監察を担う狂気法委員(Commissioners in Lunacy)、そしてその上級官庁たる内務省(Home Office)が不適切な建材や工法を認可しなければ火災は深刻化しなかったと批判された⁽⁷⁾。その結果、仮設病棟の廃止を含む一一項目にわたる対策指示が狂気法委員から各精神病院に対して出され、精神病院での防災に非常に大きな注意が向けられるようになった⁽⁸⁾。

四 コルニー・ハッチ火災事件と狂気表象 (一)

「哀れな生き物」と化する精神病患者たち

コルニー・ハッチ火災事件をあつかった新聞報道における狂気の描かれ方には、いくつかのパターンが確認できる。特に顕著なのは、火災事件に際して精神病患者は、(一)パニックに陥り、(二)恐怖で体が麻痺し、(三)あるいは火に喜ぶ、

正気と狂気のあいだ（高林）

（四）哀れな生き物と化す、という四つのパターンである。以下では、それぞれ順に確認してみたい。

まず、狂人による火災への反応に対して、「パニックに襲われた」(panic-stricken) という形容詞がほとんど決まって用いられたことについて。たとえば、以下の報道である。

（病院の）主病棟にいた患者たちはただちにパニックに襲われ、主病棟の一区画に追いやられた。そこはパニックに襲われ、安全な場所を求めて、意味のわからない泣き声を発し、金切り声で叫びながら、廊下に殺到する避難者たちに居場所を提供するために作られた、火から最も遠い場所であった。

このような「パニックに襲われた」患者たちを、同紙をはじめとする主要な日刊紙・夕刊紙は「哀れな生き物」(poor creatures) と呼ぶことも多かった。たとえば、『グローブ』(Globe) 紙は、「パニックに襲われた状態にある、この哀れな生き物たちは自らを助けるための力を効果的に発揮することができなかった」と述べている。

パニックに襲われ、自らの力で火事現場から逃げ出せない「哀れな生き物」と形容された患者たちに、新聞各紙はさらに、「恐怖で麻痺する」(paralyzed for fear) など、

救助者を妨害するという二点の特質をしばしば付け加えた。

入院患者たちの精神状態は彼らの安全にとつて重大な障害であった。彼らを逃がそうと試みるうえで、彼らをその気にさせることは全くもって不可能であった。〈中略〉彼らの振る舞いはひどく痛ましいものであった。ある者は絶対的な恐怖によつて麻痺してしまい、その一方で、ある者は危険を認識する力に欠けており、火災を愉快で娯楽的なものとして見ていたと思われる。人（救助者）の貢献心と忍耐が続く限り、病院の看護人（attendant）たちはこの哀れで頭のおかしい生き物たちを助けるのに全力を尽くした。しかし、そうした厳しい試練と状況において多くをなすのは不可能であった「括弧内は筆者による補足。また波線は筆者による強調」。

この記事について注意すべきは、筆者が下線部で強調した「思われる」(seemed) という表現である。事件当日の別の記事でも、「狂人の殺到が、自分自身を救助することにあまりにも無力であることに突然打ちのめされてしまった患者たちのなかで特に、燃え盛る建物の中で起こった

と思われ^{⑤⑥}る」と述べられている(波線は筆者による強調)。この「思われる」の主体は誰か。それは、第一義的にはこの記事を書いた記者である。しかしそれは単なる主観的な想像にとどまるものではないだろう。この想像には一切の根拠がつけられていない。つまり、根拠を付けずとも読者は理解し、共有できるといふ文化的な裏打ちがあつてこそ、このように表現されるのである。となると、ここで表現されているのは、正気の側にある者に「思われる」ということであり、観察者と被観察者、正気と狂気を分ける線が明確に引かれている、つまり狂気は他者と化してしまつてゐることになる。

正気と狂気の分割は、以下のロンドン州議会関係者の発言からもうかがうことができる。この関係者は、コルニー・ハッチ精神病院の入院患者が無意識のうちに救助者を妨害しており、「明らかに、絶望的な恐怖に襲われたことから、彼らが通常有している、ちっぽけな自己抑制の能力を完全に失つてしまった」、「救助者に彼らが危害を加えるのではないかと心配している」と取材に対して述べた。ここで注目されるべきは「通常」(ordinary)であるとか「明らかに」(apparently)といった表現である。前者は正常と異常の境界を明示し、後者は正気の側にとつてのみ「明らか」であることを物語っている。ここでも狂気は他者化されている。

史苑(第七八巻第一号)

加えて、コルニー・ハッチの入院患者たちには、「(火災に)悦ぶ躁病患者」(delighted maniacs)^{⑤⑥}、あるいは「恐怖の代わりに悦びを明らかにし」(instead of displaying fear they evinced pleasure)、「ほかの狂人たちと火災の間乱闘し」^{⑤⑥}、自らの意思に反して救出される(saved against their wills)、などの表象が付与された。ここでもまた、正気と狂気の距離を遠ざけるものだったと言えるだろう。たとえ、以下の記事である。

その哀れな生き物たちはまるでそれ(火災)が、精神病院当局によつて彼らのために催された巨大な花火の打ち上げであるかと想像していたかに見えた(appeared to imagine)。彼らは手を打ち鳴らし、声高々に叫び、笑い、手を伸ばして近づいてくる火にむかつて殺到した^{⑤⑥}。

この描写は、正気の側にある読者に対して「狂人ではないことの意識」を持たせる効果があつたと思われる。それは、ここでも「見えた」(appeared)という表現が用いられ、記者と読者の共有する正気の文化が前提とされていると推知されるからである。

以上で示したように、コルニー・ハッチ精神病院の火災

正気と狂気のあいだ（高林）

報道において、狂気は一貫して正気から分割され、その分割はもっぱら正気の側が自らの理性を確認するためになされたものであった。ここまででは、フーコーが言う近代ヨーロッパの狂気表象にかかわる特徴が、ギルマンが言う他者化された狂気がよく表されていると言えるだろう。

五 コルニー・ハッチ火災事件と狂気表象（二）

哀れな生き物を救う英雄たち

正気と狂気の境界線は、新聞記事を書く記者と書かれた狂人の、新聞記事を読む読者とそれに描かれた狂人との間にだけ引かれるわけではない。コルニー・ハッチ火災事件の現場に居合わせた登場人物には、医師、看護婦、看護人、消防士たちがおり、彼らは狂人ではない。彼らには、事件の絵図の中では狂人たちとは異なる振りつけが必要であった。入院患者たちが狂人として描かれなければならない一方で、医師、看護婦、看護人、消防士たちは正気の側にいる者として描かれなければならない。たとえば、「精神病院の看護婦」(The asylum nurse)と題された以下の記事である。

精神病患者は御しただけではなく、彼らは、身体

疾患の患者が我々に訴えかけてくるようには、我々の憐憫の情に訴えかけはしない。ほとんどの精神病の患者たちは、うつろな眼をした患者、休みなくギョロギョロと眼を動かす患者、体を丸めてうずくまるうつ病者、休みなく意味もない赤ちゃん言葉を話す成人患者、野蠻で騒々しい躁病患者である。

これは、看護婦の言として紹介されたものであり、病者と医療従事者の間の距離、正気と狂気の境界線を明らかにしている。ここで重要となるのは、正気と狂気を分別し、後者を他者化する表象の生成は、ただ狂気を遠ざけることだけでなされるものではないというフーコーの指摘である。入院患者たちが非合理的にふるまうのであれば、そのほかの者たちは合理的に理性的に行動しなければならぬ。火災事件の場合であれば、正気の側にある者たちは、人間の理性に従って英雄的に救助行動を担わねばならない。

実際、コルニー・ハッチ火災事件の報道においては、精神病院の職員たちの英雄的な救助行動の称賛が狂人のエキセントリックな行動の描写と対になっている。特に強調されたのは、男性（ヒーロー）ではなく女性（ヒロイン）、看護婦たちであった。事件当日の記事には、以下のような

記述がある。

女性の看護婦たちは、危険にさらされた女性たちを救う勇敢な努力 (gallant efforts) について特に目立っていた。そして、哀れな狂った被看護者たちに対する彼女らの献身ぶりが彼女らのうちの一名、もしくはは二名の命を失うことになりかねないことが危惧された。^⑤

この記事にあるように、看護婦の武勇伝を描写する際の典型的な形容詞は「勇敢な」(gallant) という言葉であった。この言葉が使われたのは、正気と狂気のコントラストを明確にする目的があったと考えられる。なぜならば、「勇敢な」看護婦の逸話の前後にはほぼ必ず、哀れな患者、パニックに陥った患者が登場するからである。^⑥

さらに、ここで示されているのは、看護婦ですら英雄的な行動をとるということである。当時の精神病院の看護婦というのは、資格を必要としない、社会のほぼ最下層に位置した職種だった。筆者の別稿で論じられたように、公立精神病院の看護婦は非常に道徳心が低く離職率も高いと、少なくとも精神病院の運営者側からは認識されていた。^⑦ そのため、院内の彼女たちの行動に対しては、度々懲戒処分がなされるなど、ときに倫理的な矯正の対象となった。そ

のような看護婦たちですら、火災事件に際しては英雄的な救助行動をとるとというのが上記の記事に示された含意となるだろう。

そして、看護婦の人命の価値は精神病患者よりも重いという点もこの記事には示されている。たとえば、精神科医の学会誌『精神科学雑誌』(Journal of Mental Science) でも、「(五一名の) 生命を損失したという重大な事態にもかかわらず、火災がさほど深刻ではなかったことをありがたく思うべき理由が十分にある」と述べられている。なぜ火災が深刻ではなかったのか。同誌は、精神病院の職員の生命が失われなかったからだといっている。^⑧

看護婦の武勇伝は、火災事件後数週間にわたって新聞各紙をにぎわした。たとえば、『デイリー・エクスプレス』(Daily Express) 紙は、コルニー・ハッチ精神病院の看護婦エマ・アイリング (Emma Ayling) をとりあげ、彼女が自殺願望のある患者の救助に困難を覚えたことを報じている。アイリングは煙に眩暈を感じながらも、救助に抗する患者の救出に精一杯の力を尽くしたといっている。^⑨

『モーニング・リーダー』(Morning Leader) 紙で取りあげられたのは、アダ・ウールフォード (Ada Woolford) という仮設病棟担当の看護婦である。同紙は、彼女を「アイルランドのアクセントを感じさせる、二六歳くらいのか

わいい少女で、まるで判事のような落ち着きのある礼儀を覚えていゝ」と描写し、そのうえで、彼女がいかにして抗う患者を火災から救出したのかを述べた。同紙が引用した「私は彼ら（患者）をできるだけ廊下から遠ざけようとしていたが、彼らをそこにつれてゆくのと同じくらいに素早く、彼らは戻っていった。ある患者にいたっては廊下と反対側にある日中に過ごすための部屋に入ってしまった。どのようになって？知らないわよ」というウールフォードの発言は、入院患者がいかにして理性を失っていたのか、逆に言えばウールフォードはいかに理性を保っていたのかを示している。正気と狂気の境界線は、より厳密には、医療従事者と入院患者の間にも引かれねばならなかったのである。

六 コルニー・ハッチ火災事件と狂気表象（三） 沈黙させられた狂人たち

コルニー・ハッチ火災事件の報道における狂気表象について、さらに興味深いのは、入院患者たちの言葉がほとんど登場しない点である。狂気を正気から遠ざけることが報道の背後にある文化的な作法の一つであったとすれば、非合理性に満ちた狂人たちの言葉を引くことは十分に考え得

ることである。しかし、入院患者たちの言葉はほとんど出てこなかった。彼らは火災事件の現場にいたわけだが、新聞報道でも検死官の審問でも、彼らが発言を求められることはなかった。彼らが放火したと疑われることもなかった。彼らは、正気の世界での罪から免罪されていた。

入院患者の発言を伝える数少ない記事として、事件翌日の『デイリー・テレグラフ』(Daily Telegraph)紙の記事がある。ここでは、火災現場を目撃した近隣に住む労働者のウォルター・フェアヒルド (Walter Fairchild) の証言が取り上げられている。それによると、彼が病院に駆け付けるときには火の手は救いのないほどに広がっており、看護婦たちが忙しく患者の移動を進めていた。彼は病棟に入つて患者たちを見たと言ふのだが、興味深いことに、患者に混乱している兆候はなく、叫び声が聞こえるとか無秩序さもなかったと述べている。これは、すでに見てきた狂気表象のパターンからは外れるものである。しかし、彼は近くに火の手が迫っていることを患者たちは知らないのではないかと感じたとも言う。また、ある女性患者は彼に、「ええ、私は平気です。いったい誰がここであなたに会えるなんて夢見たことでしょうか」と言ったというのである。ここで取り上げられた入院患者の言葉は明らかに、正気と狂気を切り離す方向にあるものだった。

狂人たちに近い存在の声が新聞に登場した事例としては、元患者の投書がある。しかし、その趣旨は狂人の側にたったものではなかった。彼は、精神病院を「狂気の博物館」(museum of madness)と表現し、そこにいる若い女性たちは腕や足に痣をつくり、とても頻繁に出血をしていること、患者たちは食事に殺到することを読者に開陳した。火災事件に際しての入院患者たちの非理性的な行動を指摘する記事とほとんど変わらない内容である。つまり、これは狂人の声ではなく、理性を回復した正気の側にある者の声である。この投稿文は理性の側へと戻ったからこそ与えられた発言機会であり、むしろ狂人たちは依然として沈黙させられたままだったと言えるだろう。

本節のここまですを振り返ると、フーコーが言うように、狂気は無関心にさらされ沈黙を強いられたと判断することができるかもしれない。しかし、ワディントンが言うように、病者の主体性は完全に消失し、彼らの語りが社会的にまったく意味がなかったとは言うこともまた、行き過ぎた議論となる。量的には決して多くはないが、正気と狂気の距離を決して遠ざけはしない、むしろ、狂気をいつか陥りうるものとして描く報道も見受けられるからである。たとえば、決して数は多くないうえに、言説とは言えない程度の散発的なものではあるが、コルニー・ハッチ火災事件

の報道には精神病院の一日を追った記事も見られた。ここでは、精神病院での生活が規則正しいことや病院側のシステマティックな運営の仕組みが紹介されている。ここでは、正気と狂気の距離を遠ざけるものではなかったと考えることができるかもしれない。

また、この火災での五十一名の犠牲者については、氏名・年齢・婚姻関係・職業が州議会によって公表され、新聞各紙に掲載されていることも、同様の観点から注目し値するだろう。年齢をまとめると、二〇歳代が八名、三〇歳代が一〇名、四〇歳代が一四名、五〇歳代が一名、六〇歳代が五名、七〇歳代が一名である。独身は二九名、既婚が一四名、未亡人が三名、不明が二名。職業は、被服工七名、召使い五名、その他製造工二名、掃除婦五名、洗濯婦二名、家庭教師二名、その他四名、不明二〇名(専業主婦を含む)。以上からすると、多くは配偶者や子などの直近の身寄りがない独身者が多く、典型的な低賃金の都市下層労働者の職業に就いているものが多い。また、公立精神病院ということもあり、貧民の認定がなされている者が多い。このような犠牲者に関する情報を読者がどのように受け止めたかは、現時点では判然としない。しかし、名前と年齢と職業が明らかとなることで、読者は犠牲者を匿名の狂人にすることはできなくなる。大衆紙の読者には都市下層労働者も

含まれている。彼らにとつて、独身女性や寡婦の貧困は常識と言つてよく、そのときの正気と狂気の境界線は非常にぼやけたものだったろう。

おわりにかえて

ここまでで見てきたように、コルニー・ハッチ火災事件におけるメディア報道は、入院患者たちに対して「パニックに陥った」「恐怖で麻痺する」「哀れな生き物たち」といった否定的な表象を付与する一方で、精神病院で働く職員たち、とくに看護婦たちを「勇敢な」救助者として肯定的に描いた。その陰でコルニー・ハッチ精神病院の入院患者たちは概して沈黙を強いられた。ただし、正気と狂気の分割は、常に非常な明瞭さを伴つてなされたわけではない。ときに、将来の自分に起こり得ることとしても描かれた。本稿の議論を要約すれば、このようになるだろう。

この要約を踏まえて、いくつかの問いを發してみたい。まず、近代英国において社会的かつ文化的な分割を経験したのは精神病患者たちだけだったのかという問いである。「パニックに陥った」「恐怖で麻痺する」「哀れな生き物たち」という表現は狂気をめぐる語彙だったのか。他の火災報道では犠牲者たちはどのように表象されたのだろうか。この

ような問いを検討し、近代英国における狂気表象のあり方をより明確にしてみたい。

一九世紀英国における火災事件報道をみてゆくと、「パニックに陥った」「恐怖で麻痺する」「哀れな生き物たち」といった否定的な表現が付与されたのは、精神病患者だけではなかったことが理解できる。これらの表現は、身体的な疾病患者、労働者階級、児童、外国人の存在を思い起こさせる場所、たとえば、ロンドンのスラム及び貧困者地区、労働者向けの娯楽施設などで起こった火災の報道で目立つて用いられたものであった。たとえば、ロンドン北部のアレクサンドラ・パレスで一八七三年に起きた火災事件に関する報道では、展示物を観覧に来た労働者階級の訪問者が火災に際して「パニックに陥った」(panic-stricken)と記されている^⑩。出火の原因は「注意に欠ける配管工」(careless plumber)によるものとされた。労働者階級にかかわる火災事件の例としてはほかに、ウェールズのグリニス、ブラックバーンの紡績工場、ロンドンの貧民地区ベスナール・グリーン、ソホといった人口密集地域での火災事件の報道がある^⑪。ここでは、貧しい人々が「パニックに陥る」(panic-stricken)という表現がみられる。他方で、火災事件の報道において勇敢に振る舞うのは、概して英国人であることがある。想像に難くないことではあるが、興味深い

ことに、勇敢な救助者が登場するのは、イースト・エンドでもベスナル・グリーンでもなく、なぜかウエスト・エンドやシテイといった上中流階級の土地であった^④。

こうした火災事件の表象一般の問題からわかるのは、階級や国籍を基準とした社会的マイノリティが他者化されているということである。フーコーは『狂気の歴史』において、啓蒙主義のもとで非理性のカテゴリに割り当てられたのは狂人だけでなく、貧民、病者、老人、犯罪者、浮浪者、売春婦も含むものだったと論じている。この示唆に従うならば、コルニー・ハッチ火災事件の狂気表象は、単に正気と狂気を分割していただけではなく、理性と非理性の分割という現象だったと言えるだろう。ただし、当然のことながら、貧しい地域に勇敢な英雄が登場した事例も存在するし、富裕層の犠牲者がパニックを起こした事例もあり、ここでも極論は避けられなければならない。しかし、全体的な表象の傾向としては、本稿は最終的に、極めてフーコーに近い議論を得ることになる。

一方で、正気と狂気の分割、理性と非理性の分割は近代ヨーロッパに普遍的にみられる現象ではないことも強調しておきたい。一九〇三年からほどなくして、一九一四年に第一次世界大戦が勃発すると、英国だけで数十万人の兵士が戦争神経症にかかり、正気と狂気の二分法は容易には機

能しなくなつた。戦争神経症の多発によって、英国社会はそれまで狂気にも精神病院にも無縁であつた多くの人々に精神病を経験させ、その距離を大きく縮めた^⑤。また、二〇世紀を通じて精神医学は、それまで精神病とはされなかつた様々な適応障害を精神病の体系に組み込み、精神病を人口の多くにとつて身近な問題としていった。正気と狂気の間には依然として隔たりがあることは事実である。しかし、それは時代や地域によって収縮し、それぞれの社会の規範の強さ、または逆にその緩さや寛容性を測る指標となるのだろう。それを明らかにする歴史学的な実証作業は、結論としてポーターの議論に近づくこともあれば、フーコーの議論に近づくこともある。今回は明らかに後者である。

正気と狂気のあいだ (高林)

註

- (1) シェル・フーコー、田村淑訳『狂気の歴史』新潮社、一九七五年。
- (2) Andrew Scull, *Museums of madness*, London: Allen Lane, 1979.
- (3) Roy Porter (ed.), *The Cambridge illustrated history of medicine*, Cambridge: New York: Cambridge University Press, 1996, p. 287.
- (4) Colin Jones and Roy Porter (eds), *Reassessing Foucault: power, medicine and the body*, London; New York: Routledge, 1994, pp. 3-4.
- (5) *Ibid.*, p. 4.
- (6) Roy Porter, *Mind-forg'd manacles: a history of madness in England from the Restoration to the Regency*, Athlone Press, 1987; Akhito Suzuki, 'Lunacy in seventeenth- and eighteenth-century England: analysis of quarter sessions records, Part I', *History of Psychiatry*, 2 (8), 1991, pp. 437-56; Akhito Suzuki, 'Lunacy in seventeenth- and eighteenth-century England: analysis of quarter sessions records, Part II', *History of Psychiatry*, 3 (9), 1992, pp. 29-44; Peter Bartlett, *The poor law of lunacy: the administration of pauper lunatics in mid-nineteenth century England*, London: Leicester University Press, 1999; Joseph Melling and Bill Forsythe, *The politics of madness: the state, insanity, and society in England, 1845-1914*, London: Routledge, 2006.
- (7) LCC/PH/MEN/T/3/1: Newspaper cuttings relevant to work of Asylums Committee, 1890-1901, London Metropolitan Archives: LCC/PH/MEN/T/3/2: Newspaper Cuttings relevant to work of Asylums Committee, 1901-1903, London Metropolitan Archives.
- (8) *The Newspaper press directory and advertisers' guide*, London: C. Mitchell & Co., 1917.
- (9) 精神医学側ないし当局側からの新聞記事収集に「つづは、精神医学に対するメディアの優位性を掘り崩す目的によるものだ」とする医療社会学者佐藤雅浩の議論がある（佐藤雅浩「精神医学とマスメディアの近代―二〇世紀初頭日本の新聞メディアを事例として」鈴木晃仁・北中淳子編『精神医学の歴史学と人類学』東京大学出版会、二〇一六年、一〇八―一三〇頁）。
- (10) Michel Foucault, *History of madness*, London: Routledge, 2006, p. 395.
- (11) *Ibid.*, pp. 458-459.
- (12) Roy Porter, *Enlightenment: Britain and the creation of the modern world*, London: Allan Lane, 2000, pp. xx-xxi.
- (13) *Ibid.*, p. 486.
- (14) サンダー・L・ギルマン、本橋哲也訳『病気と表象―狂気からエイズにいたる病のイメージ』ありな書房、一九九六年。
- (15) サンダー・L・ギルマン、管啓次郎訳『ユダヤ人の身体』青土社、一九九七年。
- (16) 医学史家のクリストファー・ローレンスは、病をステレオタイプ化する行為が前オイディプス発達期に根源を持つとか、母親をめぐる文化幻想であるといった議論は、過度

- に精神分析に偏重しており、参考にしたがたいものと評した (Christopher Lawrence, "Essay Review: Sander Gilman, *Disease and representation: images of illness from madness to AIDS*, Cornell University Press, 1988", *Medical History*, 33(4), 1989, pp. 496-499)。
- (17) Martin Willis, Keir Waddington and Richard Marsden, "Imaginary investments: illness narratives beyond the gaze", *Journal of Literature and Science*, 6 (1), 2013, p. 65; *Harrist Palfreyman, Visualising venereal disease in London c.1780-1860*, unpublished Ph.D. dissertation, University of Warwick, 2012, p. 15.
- (18) スーザン・ソントグ、富山太佳夫訳『隠喩としての病』みすず書房、一九八二年。関連する研究として David Harley, "Rhetoric and the social construction of sickness and healing", *Social History of Medicine*, 12(3), 1999, pp. 407-435; Ludmila Jordanova, "History, 'otherness' and display", E. Hallam and B. Street (eds), *Cultural encounters: representing 'otherness'*, Routledge, 2000, pp. 245-259 を参照。
- (19) Jonathan Andrews, "Documents and sources: case notes, case histories, and the patient's experience of insanity at Gartnavel Royal Asylum, Glasgow, in the nineteenth century", *Social History of Medicine*, 11(2), 1998, pp. 255-281.
- (20) *Ibid.*, p. 259.
- (21) *Ibid.*, p. 263.
- (22) *Ibid.*, p. 269.
- (23) *Ibid.*, p. 272.
- (24) シェル・フーロー、神谷美恵子訳『臨床医学の誕生』みすず書房、一九六九年。
- (25) E・H・アッカークネヒト、館野之男訳『ハリ病院：1794-1843』思索社、一九七八年；Mary Fissell, *Patients, power and the poor in eighteenth century Bristol*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991; David Armstrong, "The patients' view", *Social Science and Medicine*, 18, 1984, pp. 737-44; Nikolas Jewson, "The disappearance of the sick-man from medical cosmology, 1770-1870", *Sociology*, 10, 1976, pp. 225-244; Willis et al, op.cit., p. 55.
- (26) Flurin Condrau, "The patient's view meets the clinical gaze", *Social History of Medicine*, 20(3), 2007, p. 528.
- (27) *Ibid.*, p. 532.
- (28) Willis et al, op.cit. (note 17), pp. 55-73. トハ・ソントグ <http://www.hospitalstories.co.uk/ep/index.htm> を参照。
- (29) *Ibid.*, p. 56.
- (30) *Ibid.*, p. 56.
- (31) *Ibid.*, pp. 65-66.
- (32) *Ibid.*, p. 66.
- (33) Akihiro Suzuki, "Framing psychiatric subjectivity: doctor, patient and record-keeping at Bethlem in the nineteenth century", in Joseph Melling and Bill Forsythe (eds), *Insanity, institutions and society, 1800-1914: a social history of madness in comparative perspective*, London: Routledge, 1999, pp. 115-36.

正気と狂気のあいだ (高林)

- (35) Editorial, "The patient's turn: Roy Porter and psychiatry's tales, thirty years on", *Medical History*, 60(1), 2016, pp. 1-18.
- (36) Foucault, *op.cit.* (note 10), 1965; Scull, *op.cit.* (note 2), 1979.
- (37) Janet Saunders, "Quarantining the weak-minded: psychiatric definitions of degeneracy and the late Victorian asylum", W. F. Bynum et al. (eds.), *The anatomy of madness: essays in the history of psychiatry*, Vol. 3, London: Routledge, 1988, pp. 273-296.
- (38) Richard Hunter and Ida Macalpine, *Psychiatry for the poor: 1851 Colney Hatch Asylum-Friern Hospital 1973: a medical and social history*, Folkestone: Dawson's of Pall Mall, 1974, pp. 21-29.
- (39) 一八八八年地方自治法 (Local Government Act, 1888) に よつてロンドン州議会が設立された。ロンドン州立精神病院は州の治安判事からロンドン州議会のみに移管された (51 & 52 Vict. Ch.41)。ロンドン州議会は「精神病院委員会 (Asylum Committee)」を通じて監督とある公立精神病院に関する認可や指示を行う。この委員会には州議会議員を中心に二〇名程度の委員が任命される。その多くは医学に関する専門的知識をもたない。
- (40) Hunter and Macalpine, *op.cit.* (note 38), p. 81.
- (41) *Ibid.*
- (42) "The awful catastrophe at Colney Hatch", *Morning Leader*, 28 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 68-72.
- (43) *Fifty-seventh report of the Commissioners in Lunacy to the Lord Chancellor*, London: H.M.S.O., 1903, p. 16.
- (44) 一九〇一年ロンドンにおける火災件数は三六八四件、死者数は九七名々の報道がある ("London's fire record", *Penny Illustrated Paper and Illustrated*, 8 March 1902, 2128, p. 151 (Nineteenth Century British Library Newspapers; 以下 NCBLN と略記))。
- (45) "Asylum Holocaust", *Daily Express*, 6 February 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 160; LCC/PH/MENT/3/2, 68-72.
- (46) *Fifty-seventh report of the Commissioners in Lunacy to the Lord Chancellor*, 1903, p. 15. ちなみに、ロビーリーマン精神病院の仮設病棟は一八九六年に建設された。
- (47) "Report of the Asylums Committee", Minutes and Proceedings of the London County Council, London County Council, 1903, p. 273; "The Colney Hatch calamity", *Daily News*, 13 February 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 95-97; "The Colney Hatch Asylum Fire", *The Times*, 13 February 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 174; "Asylum disaster", *The Echo*, 13 February 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 174.
- (48) *Fifty-eighth report of the Commissioners in Lunacy to the Lord Chancellor*, London: H.M.S.O., 1904, pp. 20-21.
- (49) "Great fire at Colney Hatch", *Evening News*, 27 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 55-56.
- (50) "Colney Hatch Fire", *The Echo*, 27 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 58-60; "Fire at Colney Hatch Lunatic Asylum", *Evening Standard*, 27 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 61; "Disastrous Fire at Colney Hatch Asylum", *Globe*, 27 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 61-62.

- (15) "Terrible fire at Colney Hatch", *Pall Mall Gazette*, 27 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 53.
- (16) "Awful fate of lunatics", *Westminster Gazette*, 27 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 54.
- (17) "Fire at Colney Hatch", *Daily Telegraph*, 28 January 1903, in LCC/PH/MENT/3/2, 84-89.
- (18) "Terrible fire at Colney Hatch", *Daily Mail*, 28 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 89-92.
- (19) "The disastrous fire at Colney Hatch Asylum", *Globe*, 28 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 101.
- (20) "Colney Hatch Fire," *The Echo*, 28 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 105-106.
- (21) "51 lives lost," *Daily Chronicle*, 28 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 93-95.
- (22) "The Asylum nurse," *The Hospital*, 7 February, 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 166.
- (23) LCC/PH/MENT/3/2, 55-56.
- (24) LCC/PH/MENT/3/2, 54; "Fire at Colney Hatch", *Morning Advertiser*, 28 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 75-76.
- (25) 高林陽展「二〇世紀前半インテリゲンダにおける精神病院と患者：規律化から統治性へ」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』三六号、二〇一五年、一六〇—一八二頁。
- (26) "The Colney Hatch Fire", *Journal of Mental Science*, April 1903, p. 323.
- (27) LCC/PH/MENT/3/2, 160.
- (28) "Asylum fire", *Morning Leader*, 31 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 127.
- (29) LCC/PH/MENT/3/2, 87.
- (30) *Ibid.*
- (31) "Lunatic asylum inmates", *Reynolds*, 9 February 1903 in LCC/PH/MENT/3/2, 168.
- (32) "Colney Hatch Calamity", *Daily News*, 30 January 1903 in LCC/PH/MENT/3/1, 115.
- (33) LCC/PH/MENT/3/2, 68-72.
- (34) "Destruction of the Alexandra Palace by fire", *Jackson's Oxford Journal*, 14 June 1873; 6272 (Nineteenth Century UK Periodicals Online: 六レ NCUKP へ参照)。
- (35) "Disastrous fire at Glynneath", *Western Mail*, 2 October 1876, 2318 (NCUKP).
- (36) "Great fire at a cotton mill in Blackburn yesterday", *Blackburn Standard and North-East Lincolnshire Advertiser*, 7 October 1876, 2170, p. 5 (NCBLN: Part II).
- (37) "Great East End Fire", *Reynolds' Newspaper*, 8 October 1893 (NCUKP); "Terrible fire in Soho", *The Ipswich Journal*, 22 February 1896, 9537 (NCUKP).
- (38) "Serious fire at the Westend", *The Standard*, 5 January 1905, 21374 (NCBLN: Part II); "Fatal City fire", *The Penny Illustrated Paper and Illustrated Times*, 14 June 1902, 2142, p. 372 (NCBLN).
- (39) 高林陽展『精神医療、脱施設化の起源—英国の精神科医と専門職としての発展 一八九〇—一九三〇』みすず書房、二〇一七年の第三章「戦争神経症の多発と早期治療言説」を参照された。

(本学文学部史学科准教授)

Between Sanity and Insanity – Representations of madness in the Colney Hatch Asylum Fire, 1903

TAKABAYASHI, Akinobu

正気と狂気のあいだ
(高林)

This article explores cultural representations of madness in early twentieth-century England, with a particular focus on a fire incident that took place in the Colney Hatch Lunatic Asylum of London in 1903. It is still Michel Foucault to whom we should refer in thinking of cultural representation of madness. He argued that the Enlightenment defined the human reason as sublime and absolute in modern society, leaving the insane behind the cultural mainstream. It created a clear cultural boundary between the reason and unreason, and led the latter to institutional confinement in lunatic asylums for treatment and correction under coercive directions of a medical profession of psychiatrists. Such a view, from the 1980s onward, came under criticism and revisionism, led by a leading historian of medicine Roy Porter. Porter criticized Foucault, because of Foucault's "loose" treatment of historical facts, particularly as to the "great confinement", mass-scale confinement of the insane into lunatic asylums, that spread in seventeenth- and eighteenth-century Europe. Even so, however, most historians and researchers still refer to Foucault, particularly when they argue cultural representations of madness. It is perhaps because they generally agree with Foucault in his argument of cultural separation of the sane and the insane which fits in well with a nature of the Age of Reason. Hence, there are two divided views towards Foucault's history of madness. The aim of this paper is therefore to revisit and examine this dichotomy, by introducing a new case: cultural representations produced in several-hundred media reports of a fire incident at the Colney Hatch Lunatic Asylum on 27 January, 1903, which killed fifty-one female patients. Through these fire reports, this paper argues, English society represented the insane as culturally others, not a member of the sane community, by employing cultural vocabularies to make a clear distinction between the sane and insane.